

つどい

「たちばな祭」について

静岡県偕行会副会長

小長谷 聡 陸自60

今年も橋中佐（命日8月31日）を偲んで8月26日（土）陸自板妻駐屯地において、平成29年度「たちばな祭」が盛大に挙行された。

長崎県雲仙市の橋神社宮司橋昌樹様、総代会代表中瀬政則様（長崎偕行社会員）はじめ、橋中佐ゆかりの名古屋幼年学校出身者、旧三四会関係者、偕行社本部代表、県偕行会会員、陸自第34連隊隊員等、約500名が参列した。

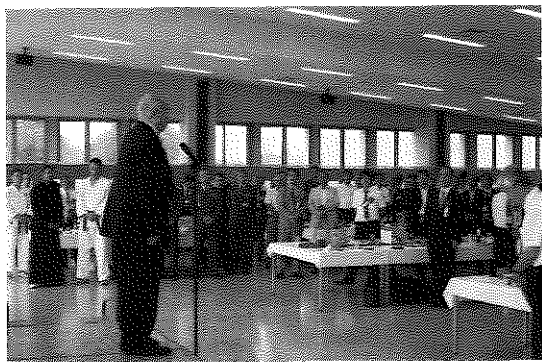
慰霊顕彰式は、執行者山之内連隊長の式辞、来賓細野豪志衆議院議員他の祝辞、橋神社宮司挨拶の後、軍歌「橋中佐」の大合唱が板妻の講堂に鳴り響いた。

戦後生まれの人にとっては、歌う機会もなく、橋中佐の人となりも、歌詞もその意味を知る人も殆どないと思われるにもかかわらず、今年で46回もこのお祭を続けてこられたことは、橋中佐が単に武人として壮烈な最後を遂げられただけで

なく、平素の言行が国民の一人として立派であったことによるものと思われる。

記念会食会において、来賓として出席された現偕行社副理事長大越兼行氏（元第2中隊長として勤務）が「たちばな祭」創設（S47・8・31）のエピソードを紹介された。特に、当時の連隊長青井秀一佐（陸士58）から「橋中佐の記述された『経験余録』を基に幹部教育を受けたことが感銘深く、自衛隊勤務において活用するとともに、海外派遣勤務に向う隊員達へも第2師団長訓示に含めて激励した。」などと語られた。このスピーチに会食参加者一同感銘を受けたようである。

式典出席者全員に、板妻駐屯地修親会と静岡県偕行会により作成された資料



大越副理事長の「橋中佐・経験余録」についての卓語

(明治38年奉天城内黄寺において、橋中佐後任の第2軍管理部長石光眞清少佐いしみつまさきよが慰霊法要を営んだ時の祭文とその起草の経緯が述べられている)が配られた。

それによると、管理部出身の5名の戦死者顕彰の祭文は、管理部軍医部長の森林太郎(鷗外)博士に依頼、文豪が軍神橋中佐以下5名の祭文を石光管理部長に代わって書き上げたものとのことである。

中でも管理部副官から転出し、第6聯隊第2大隊長として、奉天会戦において戦没された大越兼吉少佐についての祭文があるが、現偕行社大越兼行副理事長のお祖父様にあたることは、余り知られていなかったことで、驚きであった。

旧歩兵第34聯隊の会員も高齢化でその活動の停滞に心を痛めていた昨今、橋精神が明治から平成に脈々と引き継がれて行く新しい三四会の胎動の兆しが感じられる「たちばな祭」であった。